

シスチーナ礼拝堂の天井画 完全復元 祝別式に参加 2007. 7. 16.

鳴門 大塚美術館に西洋美術 2000 年の陶板画を訪ねる 2007. 7. 16.

パチカン システィーナ礼拝堂 天井画 祝別式・グイノ神父 解説講座に参加



大塚美術館にローマ パチカンのシスティーナ礼拝堂のミケランジェロの壁画「最後の審判」ならびに【天井画】が完全復元され、その祝別式があると聞いて ツアーに参加。

一日大塚美術館で過ごして帰りました。

神戸から 明石大橋を渡って、高速バスで約 40 分。大鳴門橋を渡ったところが、大塚美術館。

一度行きたかったのですが、陶板画ということで、ちょっと後回しにしていたのですが、行ってビックリ。素晴らしい美術館でした。お勤めの美術館です。所蔵作品は西洋絵画の有名な絵ばかり。その数 数千を超える絵が、陶板画に原寸で完全復元され、展示されています。陶板画といっても、原寸・原画が完全復元されているので 現物を見ているのと本当に遜色なし。しかも、 ガラスケースも無く 絵のすぐ近くまで近づける。好きな絵の前で写真撮るのも OK。



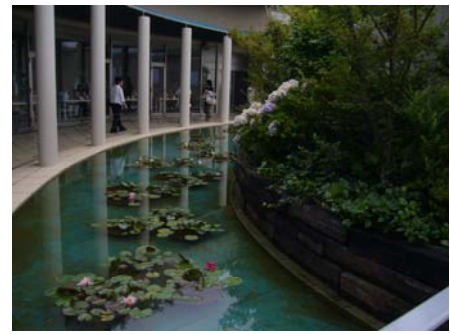
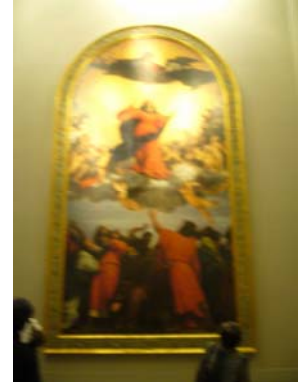
しかめっ面して せきたてながら見なくていいし、「素人が楽しめる」がコンセプトと聞きましたが、 解りやすい。教科書で習った絵 海外ツアーで見た絵 展覧会で見た絵など 次々と知っている絵があるので、うれしくなる。オーディオの解説耳につけ聞いていたら 間に合わないの、自分の好きな絵を探して、自分の感覚がたよりで歩く。これも、忘れかけていた絵の鑑賞法。忘れかかっていた絵にも沢山出合え、もう一度観たかった好きな絵にも 思いもかけず出合えました。

一日 ゆっくり 自分の好きな絵を探しに、また 出かけようと思っています。



大塚美術館所蔵 陶板画に完全復元された西洋絵画の数々 ほんの一例です





これらの絵画復元に使われた標準の陶板は 1m. *3m の大きな陶板。 焼結収縮の大きな陶板でこの大きな陶板を歪み・割れなしで焼く技術はたいしたもののである。また、写真製版と色解析が進んだとはいえ、ほぼ原画と同じ色の再現にもビックリ。 厳しい材料の制約と操炉管理のなせる職人技・もの作りの業に驚嘆する。

ミケランジェロ シスチーナ礼拝堂の「最後の審判」と天井画が大塚美術館に陶板画で復元



ローマ バチカン シスチーナ礼拝堂内部

大塚美術館に陶板画で復元されたシスチーナ礼拝堂壁画と天井画

ミケランジェロ シスチーナ礼拝堂の「最後の審判」

「最後の審判」には 400 名以上の人物が描かれている。
中央では再臨したイエス・キリストが死者に裁きを下している。

向かって左側には天国へと昇天していく人々が、描かれ、
右側には地獄へと落ちていく人々が描写されている。

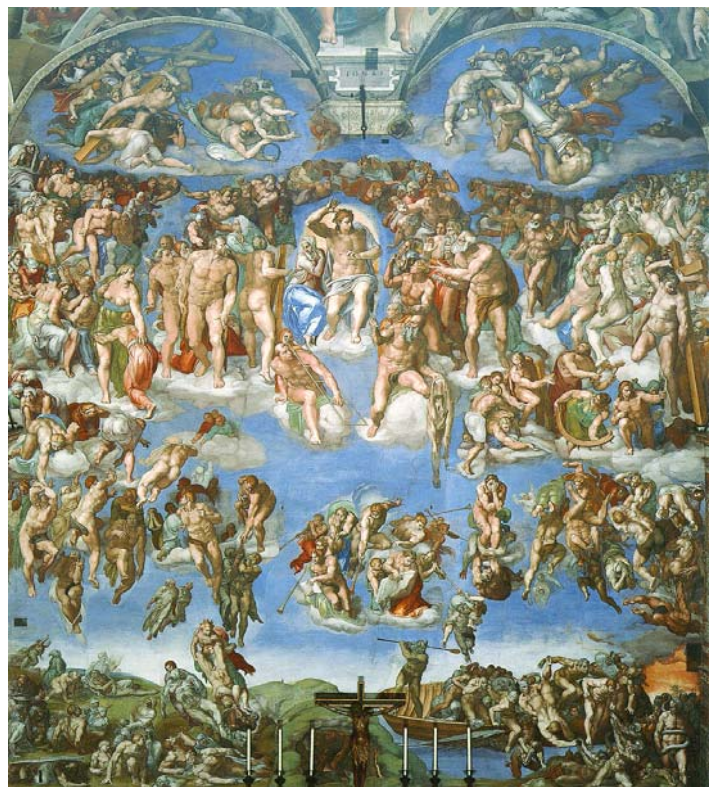
右下の水面に浮かんだ舟の上で、亡者に向かって櫂を振りかざしているのは冥府の渡し守カロンであり、この舟に乗せられた死者は、アケロン川を渡って地獄の各階層へと振り分けられていくという。

ミケランジェロはこの地獄風景を描くのに、ダンテの『神曲』地獄篇のイメージを借りた。

群像に裸体が多く、儀典長からこの点を非難され、「着衣をさせよ」という勧告が出されたこともある。

ミケランジェロはこれを怒んで、地獄に自分の芸術を理解しなかった儀典長を配したというエピソードもある。

また、キリストの右下には自身の生皮を持つ人物が描かれているが、この生皮はミケランジェロの自画像とされる



ミケランジェロ システィーナ礼拝堂の「最後の審判」 (Giudizio Universale) 1536-1541 年] 解説

Salvastyle.com | http://www.salvastyle.com/menu_renaissance/michelangelo_universale.html より

システィーナ礼拝堂天井画完成から 24 年後、教皇ユリウス 2 世の後に即位した教皇クレメンス 7 世がシスティーナ礼拝堂正面壁に壁画を描く構想を最初に練り、その意思を引き継いだ教皇パウルス 3 世がミケランジェロに制作を依頼し制作された大作『最後の審判』。

主題はその名の示すようキリストが再臨して人類を裁く教義「最後の審判」であるが、その解釈と表現には新旧の聖書のほか、ダンテの神曲やトンマソ・ダ・チェラーノの『怒りの日』、カトリック改革派の思想、マルティン・ルターの異教的思想など、さまざまなものが影響していると推測されている。その為、制作当初からスキャンダラスとして批判を受け、異教的であるという理由から画家ダニエレ・ダ・ヴォルテッラに依頼し裸体で描かれていた人物に衣服が描き加えられたのを始め、最終的には 44 箇所に加筆がおこなわれた。



最後の晩餐 登場人物配置図

1. 審判者イエス
2. 聖母マリア
3. 聖ラウレンティウス（格子型の鉄灸を手にする）
4. 聖アンデレ（X 形の十字架を手にする）
5. 洗礼者聖ヨハネ（獣の衣をまとう）またはアダム
6. 娘を伴う母親（信仰の象徴）
7. 受難具を運ぶ天使（左）
8. 受難具を運ぶ天使（右）
9. 聖パウロ（赤い衣をまとう）または洗礼者聖ヨハネ
10. 聖ペトロ（天国の鍵を手にする）
11. 聖バルトロマイ（自身の生皮を手にする）
12. ミケランジェロの自画像（聖バルトロマイの生皮）
13. 聖シモン（鋤を手にする）
14. ディスマ（イエスと共に磔刑に処され改心した受刑者）
15. 聖ピアジョ（櫛を手にする）
16. アレクサンドリアの聖カタリナ（車輪を手にする）
17. 聖セバスティアヌス（矢を手にする）
18. キレネのシモン（十字架を手にする）
19. 預言者モーセ（巻いた白髭の老人）
20. 最後の審判を告げるらっぱを吹く天使
21. 善行の書を手にする天使
22. 悪行の書を手にする天使
23. 祝福され昇天してゆく者たち



- 24 復活する死者たち
- 25 地獄へと落とされる罪深き人間たち
- 26 悪魔の洞窟
- 27 死者の魂を地獄へと渡すカロン
- 28 死者の魂を裁判する地獄の王ミノス

【裁断者キリストと聖母マリア】



裁断者（審判者）キリストと聖母マリア。キリストはこの世の終末に現れる救世主であると考えられると同時に、世界の終焉に罪深き人類を裁断する者としても解釈されるが、神聖を示す右手を罪人へ、不浄を示す左手を祝福する者たちへと、通常概念から左右逆に手をかざして描いた。



【自身の生皮を持つ聖バルトロマイ】



生きながらに皮を剥がれ殉教した聖バルトロマイは、自身の皮をその手に持つ。
聖バルトロマイの顔はピエトロ・アレティーノの姿で、剥がされた皮に浮かぶ顔はミケランジェロの自虐的な自画像であるとされている。

【天国の鍵を手にする聖ペトロ】



主イエスより渡された天国の鍵を手にする十二弟子の筆頭聖ペトロ。登場人物の類稀な運動性を示



した肉体表現は、後に台頭してゆくマニエリスムの画家に多大な影響を与えた。



【洗礼者聖ヨハネら諸聖人たち】



獣の衣を纏う洗礼者聖ヨハネを始めとする諸聖人たち。当時の文献や資料によって通例的にこの人物を洗礼者聖ヨハネとしているが、最初の人間アダムと解釈する説も唱えられている。

【受難具を運ぶ天使たち】



受難具を運ぶ天使たち。受難具とは裁断者キリストがエルサレムで捕らえられ、架けられた十字架や受難の象徴である石柱を指し、本作では最上部の二区分に、天使がそれぞれの受難具を運ぶ姿が描かれている。



【最後の審判を告げるらっぱを吹く天使】



最後の審判を告げるらっぱを吹く天使たち。またらっぱを吹く天使たちの下では、人間の善悪のおこないが記された善行の書と悪行の書を、審判される者へ見せる天使が描かれている。



【最後の審判によって復活する死者たち】



最後の審判によって復活する死者。ミケランジェロはこの場面をダンテの神曲の一節「死者は死に、生者は生きているようだ」を引用し表現したと云われている。



【祝福され昇天してゆく者たち】



祝福され昇天してゆく者たち。美術家列伝の著者[ヴァザーリ](#)はこの場面について「父なる神の一位であり審判者でもあるイエスによって祝福された者たちは、歓喜のうちに天国へと昇天しているようだ」と記している。



【地獄へと落とされる罪深き人間たち】



地獄へと落とされる罪深き人間たち。天使により天国へと昇華する人々も描かれれば、深き罪ゆえ地獄に落とされる人間と、それを抗う人間もミケランジェロは克明に描き上げた。



【死者の魂を地獄へと渡すカロン】

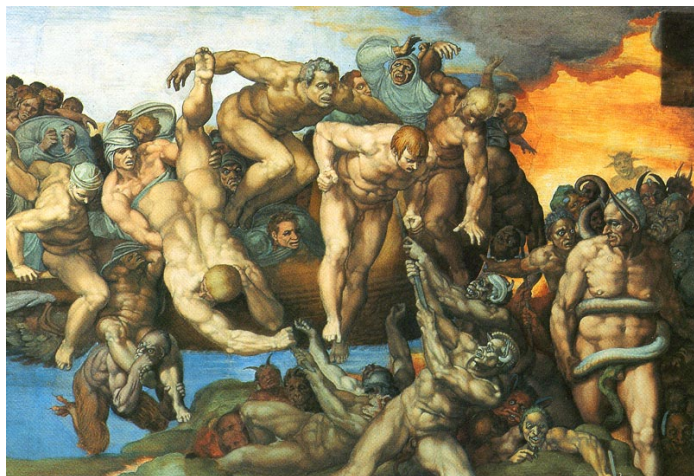


死者の魂を地獄へと渡すカロン。ダンテの神曲にも登場するカロンはギリシア神話に登場する神々の準ずる存在で、冥府の河ステュクス（憎悪を意味する）の、あるいはその支流アケロン（悲嘆を意味する）の渡し守とされている。



【死者の魂の裁判者ミノス王】

地獄の罪人たちと、死者の魂を裁判する地獄の王ミノス。ミノスはギリシア神話に登場するクレタの王で、最古の海軍を組織し海賊を追い払いエーゲ海域を制覇、法を制定し善政をおこなった後に死去するが、弟ラダマンテュス、敬虔で知られたアイアコスとともに冥府の裁判官となったとされる。また死者の魂を裁判する者ミノス王を、壁画制作について教皇に苦言を述べていた（教皇庁）儀典長ピアージョ・ダ・チェゼーナの顔に似せ描いた。



7月16日 大塚美術館に完全復元された陶板画「最後の審判」・「天井画」の祝別式に参加のツアーに参加

システィーナ礼拝堂 天井画の解説



1508年、教皇ユリウス2世の注文で着工され、4年もの歳月をかけ完成された世界最大の壁画『システィーナ礼拝堂天井画』。主題は旧約聖書の冒頭書に50章から書かれ、神による世界と人間の創造から、樂園追放、バベルの塔、ノアの箱舟などの神話的伝承と、アブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフらの族長伝承などから成る《創世記》で、壮大な図解が意味する解釈は諸説あるが、明確な体系的・教義的な秩序の中に組み込んだ宇宙論的な展開を為すとされている。

また1980年から10年かけて全面的に洗浄・修復作業がおこなわれ、現在は制作当時の鮮やかな色彩が蘇っている。

創世記が記書される旧約聖書とは、ユダヤ教の正典を自己の正典の一部としたキリスト教における名称で、後に福音書や使徒書簡を神との新しい契約（新約）の書としてまとめたのに対し、当初から保持していたユダヤ教の文書をキリストの出現を預言した古い契約の書とみなしたことから旧約の名が付けられた。律法・預言・諸書の3部39巻からなる。

天井画中央部分の創世記は9場面から描かれている。

最も有名な部位のひとつ『アダム』の創造。



アダム』の創造



主題は旧約聖書の創世記で、このアダムの創造はその中の一場面を描いたもの。

創世記第一章では、天地万物の創造主、神が7日間で全てを創造し、その6日目に創造されたのが人間（アダム）とされている。万物の創造主、神は自分の形に似た人間を創造した際、五つの祝福を人間に与えたとされている。

ここでは最初の人アダムに生命を吹き込み、地上の支配者という役割を与える場面が描かれ、中央の創造主とアダムの指先が触れる部分は、神の意志と生命の伝達を表すとされている。天地万物の神によって創造された最初の人、アダム。創世記では、この後、妻のイブとともに禁断の木の実を食べて原罪を犯し、二人ともエデンの園から追放されたとされている



〔万物の創造主〕



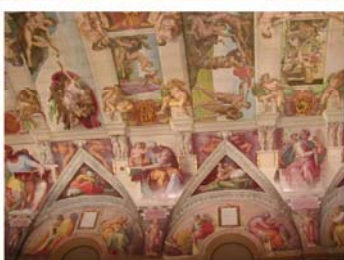
〔創造された最初の人アダム〕



〔天体と植物の創造〕



〔大洪水〕



大塚美術館に陶板画で復元されたシスチーナ礼拝堂内部の壁画